マチュピチュ（ペルー）とイグアスの滝（ブラジル）
一週間の旅行日記

昭47年・文理学部卒　土井榮次

ある調査で、世界遺産で行きたい場所のベスト3に、マチュピチュが入っているそうです。

謎を秘めた天空都市、マチュピチュ遺跡に憧れている妻から、数年前から旅行の誘いがあったが、成田からロスアンゼルスで乗り継ぎ、ペルーの首都リマまで20時間以上も掛かるので、ためらっていた。しかし、遠い所へは一年でも早く行くほうが良いかと、重い腰を上げての出発となった。

年齢は、68才11ヶ月。7月2日から前後泊を含めて15日間の長旅に出かけた。

旅行は11名のツアーで、マチュピチュ遺跡コースは、いろんな旅行会社が企画しているが、遺跡が目の前にある、「サンクチュアリーロッジ」に宿泊するコースはあまり無く、妻がいろいろ調べた結果、旅行会社が決定された。

経費は、7日間46万～15日間190万まで、ホテルの星の数や長時間の飛行機対策でビジネス利用等各自の財布と相談して決めることになる。

旅行の最中に、添乗員から、我々が一番に申し込んだと聞かされた。

〈第1日目〉上野で前泊

集合時間が午後だったので、当日でも成田空港に到着できたが、航空機のキャンセル（台風やシステムダウン障害）があると、旅行に参加出来ない恐れがあるので前泊とした。

〈第2日目〉成田空港出発から20時間の空の旅

参加者は、徳島県のご夫婦、岐阜県のご夫婦、名古屋市の女友達2名、愛知県と兵庫県の姉妹2名、佐賀県の女性1名、そして私達2名の11名が成田に集合した。

成田～ロスアンゼルス約10時間、乗り継ぎ時間2時間、ロスアンゼルス～リマ8時間40分、リマのホテル到着は深夜になった。

リマからは、国内線のため、スーツケースは20kgの制限があり、多様な気候（26℃～0℃）のペルーでは、15日分の衣装等の荷造りに苦労した。また、時差は、ロスアンゼルスマイナス16時間、リママイナス14時間、最後に行くブラジルのイグアスの滝マイナス12時間。この時差には、帰国して「時差ボケ」に数日間悩まされてしまった。

〈第3日目〉ペルー到着、リマ市内観光

深夜にホテルに着いたので、午前中はホテルで休養となっていたが、朝食後、ツアー参加者全員で近くのショッピングセンターへ出かけて、名物のビッグコーンやコーヒー等を初めて現地の通貨「ソル」で買った。

午後からリマ市内を観光。リマは、ペルーの首都。新市街は高層ビルが林立する一方、旧市街はアルマス広場を中心に、威厳のある大聖堂や市庁舎などコロニアル建築が目立つ、世界遺産の歴史地区である。アルマス広場に面した大統領府では、独立記念日のための騎馬隊と音楽隊の練習風景を見ることが出来た。日本人現地ガイドも初めて見る光景のようだった。

〈第4日目〉オリヤンタイタンボ（2，800m）～マチュピチュ村（2，000m）

いよいよマチュピチュ遺跡（2，400m）を目指すが、リマからクスコ（3，400m）まで飛行機で1時間20分、クスコからオリヤンタイタンボ駅までバス2時間、マチュピチュ村まで列車で1時間30分の道のりだった。クスコでは、食料品、被服、装飾品の店が100軒近く店を並べている市場を、高山病にならないように、ゆっくり、ゆっくりと歩きながら見物した。また、ペルー人の家庭訪問でトウモロコシを発酵させたペルーの代表的なチチャ酒を試飲したが、ヨーグルトをかなり酸っぱくした味がし、健康酒のようだった。驚いたことに農家の土間は、モルモットみたいに目が可愛いクイ（天竺ネズミ）を放し飼いにして残飯を与え、大きくなると唐揚げにして食べるという。日本でも、私が子供の頃は、鶏を庭で放し飼いにしていたのと同じなのでしょう。

第二回
洋上スクーリングとグアム島

坂本　育穂

毎年実施される日本大学通信教育部海外スクーリングは、海外旅行を経験しながら同時に科目単位も修得できるという本学が誇る学習システムだが、そもそも昭和46（1971）年の「洋上スクーリング」を最初とする。これは大型クルーズ船で西太平洋上を宿泊は船内、航行中はスクーリング、寄港地で観光をするというものだ。以後中断したが、平成19（2007）年釜山・新羅大学に於いて「海外スクーリング」として復活、以後台湾師範学校、平成25（2013）年よりハワイ大学となっている。

私はその「第1回洋上スクーリング」で小笠原→サイパン→グアム→香港→台湾→沖縄と周遊しながら洋上スクーリング受講で単位を修得した最終学年の学生であり、時は、昭和46（1971）年8月2日から8月20日までの19日間であった。この間の記録が「船上日記」として44年後の今も私の手元にある。この稿ではその中からグアム島の箇所を見てみる。

8月8日　雨後晴　朝は雨だった。アプラ港入港。静かな港だ。昨夜の進みで（筆者注：時差の関係で時計を進めたからだと思われる）まだ暗かった。なのに楽団が歓迎の演奏をしてくれる。10時頃下船。今度のガイドはおじさんでサイパン人。（筆者注：多分チャモロ族と思う）喋りすぎる位日本語をしゃべる。車中でドリンク代と称して25セントずつチップを取られた。ガメツイ。（筆者注：確かチップはバス代に含むと聞いていたからだと思う）しかしまあ、あの位エンジョイさせてくれたから良いだろう。すぐアガナへ行ってラッテ（筆者注：古代チャモロ文化の石柱遺跡）などを見る。道々グアムの風土などを話してくれる。食物に困らず常夏しかも水は豊富、害獣、害虫なし。

次は【共同通信】平成21（2009）年2月2日の記事。

〈あのころ〉

横井庄一さん帰国　グアム山中に戦後27年

1972（昭和47）年2月2日、グアム島のジャングルに終戦後も27年間潜んでいた横井庄一さんが羽田空港に帰国した。「恥ずかしながら生きながらえ、帰ってまいりました」が第一声。以後「耐乏生活評論家」として暮らした。（略）

横井庄一元日本兵は昭和47（1972）年1月24日、小川にエビを捕りにやってきた所を発見確保されたのが件の記事である。その凡そ5ヶ月前m小笠原、サイパンとやって来て、8日未明グアムのアプラ港へ到着、私は午前中グアム島をバスで周遊しており、その時横井さんはジャングルの何処かに潜伏していたのであるから私たちは全くの「知らぬが仏」で観光していた訳なのだ。日記の続きを見てみると、

〈ずい分長道中だった。グアム大学から南太平洋の海岸線を南下、タロホホ、イナラハン、メリッソ、ウマタック、アガットと回る。イナラハン、メリッソのあたり、古いスペイン風の町並みを通ったのに、バスが通過しただけだったので写真を撮らなかったのが惜しまれる。このあたりはなにか貧しそう〉

日本の敗戦も知らず、横井さんがただ1人、暗いジャングルの奥深く人の目を恐れる過酷な暮らしをしていたのは、タロホホ滝近くの竹藪の中だった。私の日記によると、バスはタロホホ、イナラハン、メリッソとグアム島南部を周回しており、（略）この時タロホホ滝は周回コースには入っていないが、当時のグアム島当局も全く知らず、ましてや私たちは何の知る由もなく、ごく間近く（でもないだろうが）を通過していた訳で、この時の両者の住んでいた世界を考えると、余りの落差の激しさに愕然たる思いがする。（略）戦後70年の今日、戦争の傷跡を知る人も少なくなった。当時は1ドル360円の固定相場時代で、手元の「外貨購入申し込み控え」によると100ドルを申し込んでいる。この金で不自由なく旅行ができたか否か分からぬが、サイパン、グアム観光がそれぞれ2900円である。当時の名簿によると職員学生を含めて参加者は約500名、島根県の参加者は私だけだったが、出身者としては原一郎、石津公雄（47／法）2名の名前が散見される。石津さんはその後浜田に帰省、現在我々校友会員の一員である。「恥ずかしながら」私の海外旅行はこの時と平成21年の中国総会山口県主催の釜山だけで終わり、井底の蛙を脱し切れそうもない。「恥ずかしながら」

富山商業高校などで教諭を務めた
岡田伊知夫さん

高校教師として、全力で生徒たちを受け止めた。自然体で、時に熱く。富山商や戸出女子（現・高岡南）、高岡商、石動で商業科の教壇に立ち、珠算部や応援部などの活動に奔走。教え子は弔辞で「昭和の名物教師がいなくなった」と悼んだ。

富山商から日本大に進学。高校時代の恩師の勧めで教員免許を取って1964年、富山商の教員に採用された。

応援部の顧問を務めた際、自宅は冬合宿の宿舎代わりに。不登校など問題を抱えた生徒を自宅で寝泊まりさせるなど、常に生徒たちに寄り添った。

男臭い応援部の世界から、女子生徒ばかりの戸出女子に移った当初は戸惑いながらも、飾らない人柄で生徒と絆を強めた。共学化に伴う閉校のショックで涙する生徒の姿に突き動かされ、学校存続や「戸出」の名を残すよう掛け合ったことも。生徒だった五島松子さん（58）＝砺波市本町＝は「決して先生面せず、言いにくいことは一つもなかった」と振り返る。

教え子との縁は卒業後も切れなかった。富山商応援部の元部員で、現在顧問を務める同校教諭の荒川剛さん（49）は教員になるよう強く促されて同じ道に進み、「生徒と接するときは命を懸けろ」と言葉を掛けられた。

相談事が年中舞い込み、70組以上の仲人を務めた。高校卒業後に関東で就職した人や高岡商時代の教え子らがそれぞれ「岡田会」と名付けて毎年のように集い、青春の思い出に浸った。

今春は東京・上野での花見に出向くなど元気な姿を見せていたものの、のどに腫瘍が見つかって入院。肺炎をこじらせ高熱が続き、帰らぬ人となった。葬儀に850人余りが駆け付け、妻の京子さん（74）は「もっと長生きして、みんなの相談に乗ってあげてほしかった。生徒たちを見守ってほしい」と願う。

亡くなった8月9日は全国高校野球選手権の開幕日で、富山商の初戦が予定されていた。対戦相手は日本大出身者によってゆかりのある西東京代表の日大鶴ヶ丘。「きっと甲子園に行ってるよ」。残された人たちの間で、そんな会話が交わされた。

（「北日本新聞」平成26年12月8日号より転載）

標高5000米への道
小濱　綾子

2014年7月8日、中国の四川省にある大姑娘（5025米）の頂きに立った。生まれて初めて、標高5000米の地を自分の足で踏むことができた記念すべき日であった。

「退職したら山登りを」と思いながら、いろんなことに首をつっこんでいるうちに、気がついたら71歳になっていた。「大姑娘に登りたい」とツアーに申し込んだら、「その年令と山歴では、とうてい無理ですよ。ベースキャンプまで行くのも大変なのですから」とあっさり断られてしまった。しかし、このままあきらめるのも悔しい。「だめ元」でやってみようと密かに決心した。

まず、富士山に行った。どうにかツアーの一行について行けた。気を良くして、マレーシアのキナバル山（4095米）にも登った。

そして、翌年、ネパールの里山トレッキングで4610米まで登ったものの、重い高山病（肺水腫）になり、ヘリコプターで下山、入院する羽目になった。それでもこりずに、インドのガルワールヒマラヤ・花の谷へ馬に乗って、4328米まで登った。さらに、この年には、妹と、「歩き遍路」を始め、2～3日ずつの区切り打ちで、1年半かけて、1400キロ米を歩き通し、長時間歩き続ける自信をつけた。

次の年には、台湾の南湖大山（3592米）、モロッコのツブカル山（4167米）に登り、さらに台湾の玉山（三九五二米）にも行ったが地震と雨のために、三四〇七米の山小屋に泊って下山した。

そして、今年2月、パプア・ニューギニアのウィルヘルム山（4508米）をめざしたが、雨と悪路のため4000米地点で引き返した。

山頂を踏めないことが2度続いた。「2度あることは3度ある」嫌な予感がしたが、「3度目の正直」にすればよいと居直った。

日帰り登山で脚力をつけること、高山病予防薬を使うこと、気を使わなくていいように1人部屋（テント）を申し込むこと、プライベイトポーターを頼んで自分はカメラだけ持って歩くことなど万全を期した。高度順応に配慮した日程、天候、同行の人たち、全てがよかった。また、高山植物の種類も量も多く、その美しさと可憐さが空気の薄い苦しさをまぎらわせてくれた。

ツアーへの参加を断られ、密かに決心してから3年、家を出てから、JR、バス、飛行機、私鉄、飛行機、バスを乗り継いで、最後は自分の足で歩いて丸六日、やっとたどり着くことができた。長い長い道であった。「やればできる」ことを教えてくれた道でもあった。

日本大学通信教育部校友会　副幹事長
日本大学通信教育部校友会　山口県支部顧問
村田義和
〒747-0341　山口県山口市徳地引谷戸祢七九九
TEL FAX　〇八三五-五六-〇七三六

日本大学通信教育部校友会　山形県支部
顧問　加藤
顧問　笠原
顧問　善一
支部長　小塚
副支部長　佐藤
副支部長　大上
副支部長　井口
副支部長　松木
副支部長　山武
副支部長　三柏憲生
副支部長　佐藤吉好
副支部長　勝静
副支部長　昌雄
副支部長　原太
副支部長　衛
副支部長　志

日本大学通信教育部校友会　静岡県支部支部長
NOZOMI　のぞみ法律事務所
所長　後藤正治
構成　弁護士　姉川博之（東京高等裁判所・元判事）
同　後藤真希子
同　山本孝介
同　林克樹
〒410-0831　静岡県沼津市市場町一二-七号
電話（〇五五）九四一-七〇〇〇

日本大学通信教育部校友会　福島県支部　支部長
ワイン・ジャム健康会
矢吹好憲
堂山健康ブルーベリー園
〒963-4203　福島県田村市船引町門沢字大旦七三
電話　〇二四七-八五-三一八〇
携帯　〇九〇-六六八六-七〇四〇

日本大学通信教育部校友会　相談役
㈱クレアー化粧品代表取締役　会長
石川寿朗
〒188-0012　東京都西東京市南町五-十二-四
TEL　〇四二-四六一-六一三八
FAX　携帯　〇九〇-五七五七-五八三一